

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

震災、台風、豪雨。自然はわたしたちの日々の暮らしに、ときにすさまじい力によって襲いかかります。自然のこの脅威を前にして、わたしたちは、人間がいかにちっぽけな存在か、人間がつくったものがいかに脆いかを、思い知らされます。

けれども、大災害のときにもっともつよく思い知らされるのは、社会のなかでわたしたちがいかに無力な存在になってきているか、です。えっ、人間は技術の進歩によって力をどんどん蓄えてきたのではないの？ さらに技術を高度なものに進化させれば、自然災害だって克服できるのではないの？ そんなギモンがすぐに頭をよぎるかもしれません。

でも、ちよっと思い出してください。東日本大震災のあの日、(被災地ではなく)東京で起こったことを。揺れや停電で電車は止まってしまいました。そして東京で働く多くの人が家に帰れなくなり、会社に泊まったりしました。歩いて帰るにも七時間、八時間とかかった人が多かったようです。それだけではありません。浄水場が放射能で汚染され、水道の水も一部で飲めなくなりました。それでペットボトルの水を求め、みなぎコンビニやスーパーに走りまわりました。そしてすぐに品切れジョウタイになりました。

「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」——これは寺田寅彦という物理学者のことばです。彼は、昭和一ケタの時代にすでにこんな警告を発していました。

文明よりはるか以前、人びとが洞窟に住んでいたとき、たいいていの地震や暴風は洞窟のなかに潜んでいればしのげた。粗末な小屋をつくって住むようになって、倒壊しても吹き飛ばされても、すぐに復旧できた。が、重力に逆らい、風圧水力に抗うような施設をつくりだすにつれて、人は建物の倒壊や堤防の崩壊で命を危うくするようになり、災害の度は逆に大きくなっていった、ということです。

そこからさらに、彼はこう言います。文明化は人びとの連携や結合を強め、緊密にしてゆく。単細胞動物なら組織を切断しても各片が別のかたちで生き延びるが、高等動物は分化がいちじるしく発達しているので、一部の損傷が系全体に致命的なダメージを与えてしまう。文明社会もこれとおなじで、局所での災害がさまざまなかたちで全体に波及しやすいついていいます。

寺田のこれらの言葉にあるように、現代の都市生活はじつはたいへん脆い基盤のうえに成り立っています。ライフラインが止まれば、人は原始生活どころかそれ以下に突き落とされるのです。自然が残る土地であれば、溪流の水が飲めます。土や石ころや枝葉で雨露をしのぐ工夫もできますが、都市の河水は汚くて飲めない、アスファルトに覆われた路上には土も石ころもない。わたしたちは、ライフラインの復旧をただただ待つしかないのです。道を歩いていても、頭上高くそびえる高層ビルや、空中を走る高架道路が落下して大災害になることもあります。十七年前の阪神・淡路大震災では、それがじつさいに起こりました。

原子力発電所の事故、高架道路の落下、「掃宅難民」……、こういうことが過去にじつさいに何度か起こっているのに、その教訓もいつしか忘れ、またおなじことがくりかえされました。さいわい高架道路の落下だけは今回は起こらずに済みましたが。

なぜ、過去の教訓が活かされてこなかったのでしょうか。なぜ、歩いて七、八時間かかるようなところから職場に働きに出るといふ奇妙なことがずっとあたりまえのことに思われ、このあたりまえがけつてあたりまえでないことが、災害時にはじめて垣間見えても、それもまたすぐに忘れられるというようなことがくりかえされてきたのでしょうか。それを知るには、自然の脅威の前では人はちっぽけな存在であるばかりでなく、社会のなかでも人はほとんど無力になってきているという、冒頭で書いたことを、さらに問いただしておく必要があります。

*

この国のほとんどの人は、ふだん、飢餓や戦争をはじめとして、生存がコンテイから脅かされるような可能性を考えないで生きています。生存そのものが危うくなるような状況をまったくと言っていいほどソウテイしないで暮らしています。なんとなく「だれかがやってくれる」と思っている社会に生きています。わたしたちは、一見とてもよくできた社会で暮らしています。電車は数分遅れただけでニュースになるくらい正確に運行しているし、停電や郵便物の遅配もめつたにありません。深夜もたいいていのところは危険も感じずに歩けるし、突然体に変調をきたしても病院に駆けつければなんとかしてもらえます。生活保護や福祉、リユウツウや防犯・防災など、社会にはいろんなセイフティネットの仕組みが備わっていて、過去の時代になかったような安心で安全な社会に暮らしているのが、わたしたちです。

けれども、このように暮らしやすい環境のなかで、知らないあいだに、じぶんたち自身がとんでもなく無能力になっていくことには、なかなか気づきません。そしてそのことが、こんどの震災のような大災害のときにはむきだしになります。先の例にもどれば、水道が止まるだけで、目の前の川には水がたつぷり流れているのに、雨はしばしばどっさり降るのに、それらを飲める水に変えることが、個人としてのわたしたちにはできません。浄水場になにかトラブルが発生すればとたんにアウト、なのです。

生きものであるかぎり、人にはどうしても自力でしなければならぬこと、しつづけなければならぬことがあります。食べること、そのために食材を調達し調理すること、食べたあとのゴミや排泄物を処理すること。赤ちゃんをとりあげること、子どもを育てること、子どもに世の中のことをいろいろ教えること。身近に病人がいればその看護をすること、おとしよりの世話をすること。人を看取り、見送ること。人と人のあいだでいろいろめんどうなめ事が起こればそれを調停すること。防犯にツトめること、などなどです。これらは人のいのちに深くかわることなので、細心の注意を払っておこなわなければなりません。失敗は許されません。こうした「いのちの世話」をいいかげんにしたつければ、あとでぐっと大きくなって身にふりかかってくる。

そのために、先人たちは、これらの「いのちの世話」を確実に代行するプロフェッショナルを養成し、またその「世話」の場所を公的な施設として整備しゆきました。これは、社会が「近代化」するときの大事な一面です。めんどろな排泄物処理は文字どおりみずから手を汚さなくとも、「下水道」というかたちで行政がやってくれる。病気になるれば病院に行って、医師の診断と治療を受ける。そのあとは看護師に看病される。夜に「火の用心」とみんで交替で地域を回らなくても、消防士・警察官が見回ってくれています。もめ事がややくしくなれば弁護士を立てることができま。

たがいのいのちを世話しあう、そんな大事なことを能力の高いプロが代行してくれる(もちろんそのために税金を払い、サービスマ料を支払う義務が生じます)が、そんな「安楽」な社会に何代にもわたって暮らしているうちに、しかし、わたしたちはそれらをじぶんでやる能力を失ってしまいました。かつてはだれもがそれができるよう、家族に、あるいは地域社会のなかで鍛えられてきたものですが。

くりかえします。生きていくうえで一つたりとも欠かせぬことの大半を、わたしたちはいま社会の公共的なサービスに委託して暮らしています。たがいのいのちの世話を、病院や学校、保育園、介護施設、外食産業、クリーニング店、警察署・消防署などにそっくり任せて生活しています。これは福祉の充実、あるいは「安心・安全」と世間では言われますが、ウラを返していえば、各人が自活能力を一つ一つ失ってゆくカテイでもある。わたしたちは社会のこのサービスが事故や故障で止まったり、劣化したり、停滞したりしたとき、それに文句（クレーム）をつけることしかできなくなっています。じぶんたちで解決策をアイアンしたり、あるいは行政やサービス業から仕事を取り返してじぶんたちでやりますと言うことができなくなっています。それほどわたしたちは市民として、地域社会の住民として、無能力になっているのです。このことが震災のような大災害のときにむきだしになるのです。ふだんはそうしたサービス業務にあるていど任せておくとともに、いざというときのために、いつでもそれらが自前でできる準備だけはしておかなければ、非常時に復興を担えない、とても壊れやすい存在に一人ひとりがなってしまう。

(窪田清一『おとなの背中』による)

問一 —— 線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 —— 線部1「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」の内容をよりくわしく述べている部分を問題文中から七十五字以内でぬき出し、始めと終わりの六字を答えなさい。

問三 —— 線部2「一部の損傷が系全体に致命的なダメージを与えてしまう」とありますが、現代の都市生活においては、どのようなことがこれにあてはまりますか。「*」以降の内容から、具体的に答えなさい。

問四 —— に入れるのに最も適当な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア われ関せずで イ じだんだをふんで ウ いわれるがままに エ 夜を日について オ なすすべもなく

問五 —— 線部3「掃宅難民」とはどういう人のことですか。「通勤」「電車」という言葉を必ず使って答えなさい。

問六 —— 線部4「むきだしになります」とありますが、「むきだしになる」とはここではどういう意味ですか。自分の言葉で答えなさい。

問七 —— 線部5「いのちの世話」とは、どのようなことですか。問題文中の言葉を使って説明しなさい。

問八 —— 線部6「わたしたちは市民として、地域社会の住民として、無能力になっている」とありますが、これはどういうことですか。「いのちの世話」という言葉を必ず使って説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(A)～(C)は、短歌につけられた記号です。

機嫌きげんのいい母でありたし無農薬リンゴひとかけ摺すりおろす朝(A)

離乳食りよくを作っていたころの歌だから、もう三年近く前のことだ。けれど、この「機嫌のいい母でありたし」という思いは、今も変わらない。いや、変わらないどころか、日々強くなっている。子どもの環境を考えると、大事なことはさまざまあるだろうけれど、「おかあさんの機嫌がいい」というのが、一番ではないだろうか。

ものすごくシンプルで、簡単そうなことだが、環境としての「機嫌のいいおかあさん」を維持するのは、実はとても大変だ。自慢ではないが、私は人一倍気が長く、まあめつたなことでは人間関係のトラブルも起こさず、ちよつとやそつとは腹を立てないという性格だ。

それでも、子どもを相手にしていると、ついつい怒鳴どなったり、恐い顔こわいをしてしまう。「だめだめだめ！」と日に何度、声を荒らげることだろう。

もちろん、生命いのちに関わるような危険なことからは、声を荒らげてでも守ってやらねばならないし、人としての基本のルールやマナーを身につけるためには、厳しく叱しかることも必要だ。が、そういう場面でなくても、なんだかイライラしてしまうことがある。

イライラ＝不機嫌の原因は、子どもが自分の思うようにやってくれない、ということが多い。急いでいるのに、なんだかんだと遊びながら道を歩かれたりすると、「んもう早くしてよ！」となる。が、よく考えてみれば、自分にも「散歩」の気持ちがあれば、ここは機嫌よく歩ける場面なのだ。

電信柱があれば棒でたたき、郵便ポストがあれば手をつっこみ、横断歩道があれば白い線の数を数えてみたくなる。こういうことに根気よくつきあうって待つということが、特別何かをしてやるよりも、大事なのだという気がする。

叱られて泣いてわめいてふんばってそれでも母に子はしがみつく(B)

子どもにとつて、ある意味自分は全世界に近いぐらいの存在なんだな、と思うのは、この歌のようなときだ。母が世界の一部にすぎないのなら、叱られて泣いてわめいてそこを離ればいいのだが。子どもは、そうはできない。この母にもう一度機嫌よくなってもらわないことには、世界は再開されない、というぐらいの思いがあるのだろう。

時々、私より小さな子どもを持つ友人から、相談を受けることがある。「母乳でがんばりたいのに、なかなか出ない。もっと努力すべきかしら?」「保育園に預けるかどうか、迷っている」。

誰にでもあてはまる正解なんてないけれど、少なくとも私はこうアドバイスする。「あなたが機嫌のいいママでいられることを、最優先するのがいいんじゃない」と。それは、自分本位になれということではなく、子ども本位に考えて、のこと。イライラしながら母乳を出しているお母さんより、多少栄養的には劣つても、機嫌よくミルクをくれるお母さんのほうがいい、と思う。

子どものことを思うあまり、機嫌が悪くなるというパターンもある。以前、本屋さんの児童書のコーナーで、すこぶる機嫌の悪いお母さんを目撃したことがある。

「どうしてあなたは、こういう付録のついた本ばかり選ぶの。本はオモチャじゃないのよっ！」

結局子どもは、お母さんの顔をうかがって、優良そうな物語の本を選んでいった。「いい本に出会わせてやりたい。しかも自主的にそれを選ばせたい」という思いが、前のめりになった結果だろう。そもそもは、子どもへの愛情から生まれた強い思い。そこが切ないのだが、本とのいい出会いとは言い難い場面だった。

このように人のことはよくわかるのだが、自分と子どもとの関係では、似たようなことをしてしまいがちだ。日々反省しつつも、「機嫌のいい母であること」は、自分の中心にある指針だ。それは子どもがどんなに大きくなっても、変わらないだろうと思う。

たんぼの綿毛を吹いて見せてやるいつかおまえも飛んでゆくから (C)

息子との散歩コースのひとつに、隅田川ぞいの公園があった。広々とした緑の斜面があつて、春にはたんぼぼ、夏にはバツタ、秋には小犬のしっぽのようになったエノコログサ……。ささやかではあるが、都会のなかに残された自然を、感じさせてくれる場所だった。

たんぼぼが綿毛になると、ふうっと吹いて見せてやるのが楽しみだった。はじめは、何がおきたのか、わからないという顔をしていた。まあ白いものが、突然ばらばらになって飛んでゆくのだから。

そのうち、自分でもやってみたくなったようで、息子はふうふうとかわいい息をかけていた。だが、その程度の風では、なかなかうまく飛ばない。しまいにはぶんぶん振り回したり、手で綿毛をつかんで、投げたりしていた。

たんぼぼの綿毛は、たんぼぼの子どもたちだ。地面に根をはっている母親は、子どもたちのこれからは、見とけてやることはできない。ただ、風に折るばかり。

たんぼぼの母さん、せつないだろうなあ——そんなことを春の斜面で思うようになったのも、自分が子どもを持つてからのことだ。そしてまた、「見とけられない」という点では、実はたんぼぼも自分も同じである。

いつかは、この子も、この綿毛のように飛んでゆく。そう思いながら吹いていると、それはもうただの遊びではなく、息子と自分の時間が限られたものであることを、切実に感じるひとときとなった。ほら、あの子はもう、あんなに速く。ほら、この子は、こんなところでひっつかつて。

息子と一緒にいられる時間を、だから私は「たんぼぼの日々」と感じている。綿毛になって飛んでいったらもう、あとは 6。

(俵万智『たんぼぼの日々』による)

問一 線部 i、ii、iii の問題文中での意味として、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

i 「すこぶる」

ア 非常に イ 見るからに ウ 気のせいカ エ たまたま オ 何度も

ii 「ささやかではあるが」

ア たまにしかみられないが イ ほんの一部にすぎないが ウ 小さく目立たないものではあるが
エ 個人的な好みであるが オ 大きな言い方ではあるが

iii 「せつない」

ア ゆくえが気になって仕方がない イ わくわくするほど楽しい ウ 成果があがるのが待ち遠しい
エ 胸がしめつけられるようにつらい オ 努力がむくわれずむなし

問二 線部 1 「おかあさんの機嫌がいい」というのが、一番ではないだろうか」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。次の説明文の に入れるのに適当な言葉を、(B) と (C) の間の問題文中の言葉を使って、二十五字以内で答えなさい。

母親というものは、 と思うから。

問三 線部 2 「機嫌のいいおかあさん」を維持するのは、実はとても大変だ」とありますが、これはどうしてですか。「くから」に続く形で、問題文中から二十字以内の言葉をぬき出して答えなさい。

問四 線部 3 「散歩」の気持ち」とありますが、これはどのような気持ちのことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 子どもに人としてのルールやマナーを学ばせる機会を大事にしようという気持ち。
イ 子どもの危険な行動に対してひやりとしても、それをがまんしようという気持ち。
ウ 子どもが自分のしようとすることに逆らっても笑って許してやろうという気持ち。
エ 子どもといっしょに、いろいろなものに興味を持って足をとめようという気持ち。
オ 子どもがする無意味な行動をヒントに、短歌を作れることを喜ぼうという気持ち。

問五 線部 4 「似たようなこと」とありますが、これはどのようなことですか。次の説明文について後の問いに答えなさい。

母親が、X「こと」によって、子どもに Y「よう」にさせてしまい、子どもの成長をうながせなくなってしまうこと。

1 X に入れるのに適当な言葉を、問題文中から二十字以内でぬき出さない。

2 Y に入れるのに適当な言葉を、問題文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問六 —— 線部5「ほら、あの子はもう、あんなに速く。ほら、この子は、こんなところでひっかかって」とありますが、ここで母親としての筆者はどのようなことを想像していますか。自分で考えて答えなさい。

問七 6 に入れるのに適当な言葉を、問題文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

三 次の詩とそれについての解説文を読んで、後の問いに答えなさい。

やさしい言葉

石垣りん

祝いごとに
 ひとかかえの花束をもらった。
 独り占めする欲の深さに
 1 気持が花より赤くなり
 どうぞ二、三本
 2 ここから抜き取って下さいと
 そばにいた

私より年若い女性詩人に差し出すと
 美しいその大学教授は
 大きな目があっただけ見ひらいて
 ケラケラ笑い
 3 歌うように言ったものだ。
 「みんなとっておきなさいよ」
 4 こんどもらうのは白い花だよ」
 5 目をつむって

心おきなく赤い花を抱いた。

これ、よく見ると、ちよつと面白い詩なのです。石垣りんが六十四歳のときに刊行された最後の単行詩集に収められています。大学教授という社会的には地位の高い、けれど自分よりは年が若い女性詩人と「私」が出てきます。何かのお祝いの席で、「私」が花束をもらう。この「私」は、ほとんど石垣りんのこととして読める詩です。花束をもらうのは主役です。なのにこの期に及んでも、この「私」は花を独り占めすることに罪悪感を持っています。心底、人のよい人なのでしょうが、腹を括り主役に収まるのも実はエネルギーを要すること。謙遜もほどほどにねと、ちよつと意地悪を言いたくなるような場面でもあります。

もしあなたが、石垣りんに、ここから二、三本抜き取って、と言われたら、どうしますか。わたしなら一度は断るものの、素直にもらうかもしれない。なかなかこの女性詩人のようなリアクションはできません。しかも石垣りんより年下ですよ！

でも言われたほうの石垣りんは「むっ」としません。ありがたい、やさしい言葉だと、心おきなく花束を抱きしめる。ああ、そうかとわたしは思います。石垣りんのような人に、花束を心おきなく抱いてもらうというのは、実は大変なことなのです。外から見たら、この「私」をいじめているような言葉ですが、「私」にとつては、これが何よりも「やさしい言葉」だという。「やさしい」というのは、この詩人にとって、「真実」という意味だったので。

(小池昌代「詩を読んで生きる 小池昌代の現代詩入門」による)

問一 —— 線部1「気持が花より赤くなり」とありますが、これはどのような気持ちを表していますか。簡潔に答えなさい。

問二 —— 線部2「大きな目があっただけ見ひらいて」とは、何をどのように思う気持ちを表したのですか、答えなさい。

問三 —— 線部3「こんどもらうのは白い花だよ」とありますが、「こんど」とはいつのことですか、答えなさい。

問四 —— 線部4「目をつむって/心おきなく赤い花を抱いた」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明したものと最も適当なものをおの次から選び、記号で答えなさい。

- ア 花束を独り占めにしていいとすなおに受け入れている。
- イ 女性詩人の言葉に傷つき、赤い花になぐさめられている。
- ウ 赤い花束を自分と重ね合わせて親しみを覚えている。
- エ 自分の気持ちにふたをして、赤い花束を受け入れている。
- オ 赤い花束にはまだ遠慮が残るが、女性詩人に同意している。

問五 —— 線部5「石垣りんのような人」とは、どのような人ですか。解説文をふまえて答えなさい。

問六 詩の題に「やさしい言葉」とありますが、次の説明文について後の問いに答えなさい。

「女性詩人」の言葉は、「私」が高齢であることへの X のようだが、「私」はこの言葉を「真実」だと思い、むしろ Y。

1 X に入れるのに適当な言葉を、解説文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

2 Y に入れるのに最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が年をとりすぎていることに気づかされ、落ちこんでいる。
- イ 自分に高価な花束を用意してくれた人々に申しわけなく思っている。
- ウ 限りある生を大切に生きようと思わせたのだと感謝している。
- エ 年寄りには年寄りらしくひっそりと暮らすのがふさわしいと思っている。
- オ 自分は本当は赤い花が大好きだったのだと気づかされ、満足している。

